



山梨県障害者差別解消支援ネットワーク会議

【トピック】

- 車いすを使用する大学生の学生生活をとおして、大学におけるバリアフリーの状況を考えます。
- 「楽しさを共有する」ことについて考えます。

事務局：山梨県障害福祉課
〒400-8501
山梨県甲府市丸の内1-6-1
Tel 055-223-1460
Fax 055-223-1464
E-mail shogai-fks@pref.yamanashi.lg.jp

何も無いところから始めることは大変なことだとも思いますが、考え方を変えれば「自分仕様」にできることが多くなるようにも思います。大学で自分仕様の学生生活を創りだし、有意義な毎日を過ごしている方を紹介します。

学生生活からうかがうバリアフリー状況 ～佐藤氏(山梨大学)のインタビューから～

佐藤誠也氏は、車いすを使用する山梨大学教育人間科学部在籍の4年生。学生生活のまとめに忙しい時期ですが、4年間の学生生活についてお話をうかがうことができました。佐藤氏のお話からうかがうことができる大学生活でのバリアフリー状況を考えます。



【佐藤誠也氏の紹介】

- 福島県出身で、24時間365日車いすでの生活が基本
- 教員か企業への就職かで迷っていたが、企業への就職を決めた。
- 「いい友達を見つけて、いろいろチャレンジしてください。それが山梨大学でだったら嬉しいな」

入学までの経過 進路選択でのバリア実感

進路選択にあたり、まず出願先を検討する過程で、自分で、また高校の進路指導担当教員がいくつもの大学に出願について問い合わせた。しかし、教員免許取得に関し教育実習が実質実施困難、学内の生活が施設設備上難しいことが多い等の理由でほとんどの大学で拒否された。しかし、山梨大学だけは、「ほぼフリーパス」で「来てみたら何とかなるでしょう」という魅力的な回答があり、受験するに至った。

山梨大学の、考えてみれば「随分大雑把」とも思える対応だったが、その当時の自分にとっては、大変ありがたい返答であった。実際、入学してみると、受入にあたっての施設設備上などの改善は、これからの整備の箇所が多く、障がい学生修学支援室の担当者と、学生生活上の「こまったこと、できること探し」から始めた。車いす使用者の受入は教育学部として初めてであり、施設設備上、講義受講上の課題などを担当者とマンツーマンで確認し、改善していただいた。現在は、大学の努力で特に問題となることはなく、快適な学生生活を送ることができる状況になっている。

バリア解消の状況

- ①ガイダンス会場の変更、車いす使用でも受講可能な教室での講義への変更等講義受講上の配慮
- ②大学構内の段差等移動上の難しさの解消
- ③学内の支援体制の充実(障がい学生修学支援室としての支援)
- ④分かり合える友人との付き合いから楽しく充実した学生生活



【山梨大学構内の整備】

【左：建物間をつなぐ段差を解消し、から構内へのゲートで、車いすと人のみ通過可】

【右：「車いすゲート」駐輪場

から構内へのゲートで、車いすと人のみ通過可】

入学当時の県内の賃貸物件事情 まずは、部屋探し

入学前の平成26年3月中旬に来県し、まずは部屋探しをと不動産業者回りをしたが、どこの業者でも「バリアフリーの賃貸物件はない」という返答だった。バリアフリーの物件ではなくても、大学までのアクセスやこのくらいの段差なら大丈夫ということで部屋を選んだが、いくつかの選択肢からというのではなく、そこしかなかったという状況だった。

最近では、不動産業者もいくつかの物件を扱うところも出てきている。今後のことを考えると、例えば、大学の学生課と不動産業者とが協働して、様々なニーズに応じることのできる賃貸物件の蓄積ができるとういと思う。

後輩学生への支援 自分の経験を伝えたい

自分自身もサポーターとして障がい学生修学支援室に登録し、他障害の学生の相談にあっている。また、障がい学生修学支援室企画の講座に車いす使用者への介助法の講師として参加している。障がい学生修学支援室への相談、担当者との協力の取組をとおし、大学構内の様々な障壁はほぼ解消され、学びやすい環境になったと感じている。

大学で開かれたオープンキャンパスでは、車いす使用の参加者がいるという情報を得て直接会って話す機会をつくり、大学での学びやすさについて説明した。一人では行けないところでも、友達と一緒になら行けないところはほとんどないので、どんどん出かけてほしいという思いを伝えたい。

学生生活の振り返り 分かり合える友人の大切さを実感

友人との生活では、友人とともに工夫して過ごして楽しさを共有したという思いが強い。例えばスキー場に皆で出かける場合、スキー・スノーボード派、ソリ派、温泉派というようにそれぞれの好みで楽しみながら、「一緒に遊びに出掛ける楽しみ」を共有することができる。こういうお互いの楽しみ合う気持ちが大切なのだと感じている。

学生生活をとおして感じたこと 自由に楽しく学ぶための秘訣

ひとり暮らしの経験をとおして、生活の中で自分ができないことを知り、協力して欲しいことをどう伝えるかを学ぶことができた。生活の中でできないこと、不便なことをあきらめてしまう人が多いが、諦めない、我慢しないという気持ちが皆で共有でき、助け合うようになれば良いと思う。日常の生活で助け合いの成功体験を重ねることで、我慢する、諦めてしまうことがなくなるのではないかと思う。日常的に積極的に行動することが、不便さを認識した際、それを周囲に伝えることができることにもつながる。困難だと感じたことでも可能になっていくことを経験することが大切ではないかと思う。様々な障壁は、バリアではなく乗り越える手段はいくらでもあることを知って欲しいし、考え方を変えてほしい。

【寄稿】「学生生活で得たもの」 山梨大学教育人間科学部4年 佐藤誠也

「お手伝いしましょうか？」

私はその時、とある駅のホームで考え込んでいた。目の前には階段とエスカレーター。ホームの端から端を見渡してもエレベーターのマークは存在しなかった。

私に残された選択肢は二つ。①エスカレーターを登る。②あきらめて帰る。そんな時であった。見知らぬお兄さんから声をかけられたのは。

車いすで生活する人にとって階段は、目の前にそびえる高い壁、もしくは奈落へ続く深い穴である。それは障壁、つまりバリアに他ならない。しかし、それは踏破不能の断崖絶壁ではないのである。そう、自分一人でないのなら。「ちょっとお願いしてもいいですか？」

私の依頼に快くうなずいてくれたお兄さん。私はエスカレーターに車いすごと乗り、動く手すりにしがみついて壁を登り切った。お兄さんはその後ろで車いすを持ち支え続けてくれた。

「ありがとうございました」

「いえいえ。お気をつけて」

そもそも人間が一人で行ける場所など、微々た

【構内を”疾走”する佐藤氏 ～山梨大学～】



るものである。富士山に一人で登るのはしんどいし、宇宙に行こうと思ったら国境を越えたプロジェクトが必要である。車いすから見上げる2階のフロアは別世界に感じるものだが、隣に手伝ってくれる人がいれば、その距離はぐっと縮まる。今まで行けないと思っていたところに行けちゃった経験は、大興奮の異世界ファンタジーである。そんな体験をあなたにもたくさんしてほしい。

大切にしてほしいのは、行けるかどうかの情報ではなく、あなたが行きたいかどうかの気持ちである。そして一緒に行きたい友人、一緒に行きたいと思ってくれる友人との出会いを、何よりも大事にしてほしい。そうすれば、世界が立体的であることに気づけるはず。

私が、大学生活で得たものは、こんなところですよ。

楽しみの共有

前号No.18掲載の「推進員日誌」で、矢崎繁氏の盲導犬に関する記事に関し「お互いの理解のためには、日々の楽しさを共有することも大切」ではないかとお伝えしました。今回の佐藤氏のお話でも、友人との活動が日常的に活発である様子が伝わってきました。

以前ある研修会で、電動車いす使用の方が、「友人が『お前と一緒にいきたいから誘うんだ』と言っては迎えに来てくれる」と語っていたことを思い返しています。一緒に楽しむ、楽しみを共有する関係が日常的にあることは誰にとっても嬉しいことです。この楽しみを共有しようという思いが、様々なバリアをなくしていくことにつながるのではないかと感じています。世の中のすべての人が、様々な楽しみを共有するためには何が必要なのか。思いやりとかいたわり合いとかの感覚ではなく、お互いさまの感覚を背景にした自然に湧き出る一緒に楽しもうという感覚ではないかと思うのです。

高等教育における障害学生支援の進展

高等教育における障害のある学生の受入や支援は、特に障害者差別解消法が始まった昨年4月以降、さらに注目されるようになっていきます。

10年ほど前までは、例えばある大学では、聴覚に障害のある方が入学した時点では具体的な支援と方策はなく、当事者自身が周囲の学生に相談してノートテイクの協力を得たり、手話サークルをつくって理解の輪を広げ、学びやすさを自ら作りあげてきた事例もあります。パイオニアとしての苦労は大きく大変であったと思いますが、理解と協力の輪を広げ、続く後輩たちへ勇気を与えた功績は計り知れないと感じます。現在は多くの大学で障害学生支援の担当部署を設けており、授業や日常の活動への情報保障、環境保障が進んでいます。山梨大学でも「障がい学生修学支援室」を設置しており、本ネットワーク会議の会長である小畑文也山梨大学教授はこの支援室の室長を兼任されています。今回の山梨大学のパイオニアとも言える佐藤氏へのインタビューも小畑会長からの紹介で実現しました。

推進員日誌 障害者差別解消推進員の日々の思いから

佐藤氏には、学生生活を締めくくる大変お忙しい時期にお話をうかがいました。佐藤氏との時間は、私にとっては大変貴重なひとときであり、佐藤氏の4年間の学生生活の様々な場面を思い描きながら、バリアの意味について考える時間にもなりました。

帰り際、駐車場に向かいながらシャーという車いすの音を聞き、振り返ると、車いすで疾走する佐藤氏の姿をとらえることができました。この日は、佐藤氏は友人と出かける約束があったようです。貴重な時間を頂戴し、ご迷惑をおかけしました。

待ち合わせ場所へと急ぐ佐藤氏の姿と疾走音から、構内を自由に移動し、学生生活を楽しんでいることを十分に感じ取ることができました。

編集及び文責：古屋徳康(県障害者差別解消推進員)